

「妙見橋で会いましょう」

青井 月

まだ彼岸をすぎたばかりだというのに気の早い桜が足元にふびいていた。待ち合わせは一時だから時間はまだまだある。駅まで歩いてみようかと思った。風は強いが、それがかえって清廉な春の息吹をかんじさせる。日曜日の昼とあってさくら通りは結構な人出だった。去年のさくらは憶えていない。たわわに枝を揺らすさくらなど愛でる気分になれなかった。

夏休みにどこに行くかで言い争いになり、夫とはそれで最後となった。

「もうさ、別れよう。合わないんだよ。君とは。」

「なに、それ。」

「気が休まらないんだよ。君といても。なんなの？そのインスタとかフェイスブックとか、今、こんな事してます、とか、ご飯の写真アップしたりさ」

「それは、友達とか、みんなしてるし。いろんな人と繋がれて楽しいよ。それが気が休まらないのっ」

「それにさ、なんか妙に意識高い系っていうか、なに無理してんだよ。今こんな事勉強してます、みたいなツイッターとか、あげんなよ。夕飯食ってる時にさ、時事ネタとか、裁判結果とかさ、もう、その無理してるかんじが疲れんだよ。うっとおしい。」

矢継ぎ早に言葉を浴びせてくる夫にああ、この人は優秀な弁護士なんだろうなと感心した。確かに私は無理してた。この人に合わせようとして、以前なら3面記事しか読まなかった新聞をキツチリ1面から読むようにした。大学のオーブンカレッジに通い、三十代からでも大学生みたいなハッシュタグを付けてツイッターに投稿したりしていた。それが、鼻につく、イラつく、休まらない、挙句の果ては、バカさらしてんじやないよ、となったわけだ。

結婚生活は2年で終わった。夫にとったら離婚の手続きなんか朝飯前でちゃっちゃとすまし、そして半年後にはちゃっちゃと誰かの夫になった。今思えば、私がバカをさらしている間に夫は夫で気の休まる居場所を見つけ出してたのだろう。あれから一年半が過ぎてもやっと思える余裕ができた。散りゆくさくらにあっばれと褒めるゆとりもある。時間はありがたい。記憶を水面に映る不確かなものへと変えてくれる。頭上に垂れ下がった枝を手でつまみ写真を

撮った。インスタにアップする。ついでにツイッターにもバカをさらしてみる。最近では元夫もプライベートをさらし気味でどうやら赤ちゃんが出来たらしい。おめでとうございます、とリツイートしようかと思ったが、止めた。SNSってなんて便利なツールなのだろう。家族や友達をつなぎ、まだ見ぬ誰かともつなぐ。未来への時をつなぎ、ともすれば、過去をもつなぐ。そのまだ見ぬ誰かとこれから私は、私のひいばあばの恋の軌跡を確認するのだ。待ち合わせ場所の相模原駅成城石井前に着いたらラインすることになっていた。

それを見つけたのは去年のひな祭りの日だった。今日中に片付けないと、行き遅れちゃうからね。と言う、母なりのジョークだったのだろう。行き遅れるどころか、出戻ってる。と返す気力もなく、あの頃はまさに失意のどん底だった。重い体で男雛と女雛をしまっていた時、私はそれを見つけたのだ。押し入れの隅の方に埃を被った文箱がひっそりと置かれていた。それはその中に身を隠すようにしまわれていた。

「なに：これ」
セピア色に変色した半紙はきっちり紐で綴じられていて、墨で書かれた仮名文字はけして達筆ではなく、つたなかつた。
「なに：」もう一度つぶやきながらページをめくる。

昭和二年十月二十日

朝早くから浅間神社で拝んでいる人がいた。

私もその人の後ろのほうで手を合わせる。

その人は私に軽く会釈すると去っていった。

何だかとても清々しい。

昭和二年十月二十四日

寒くなってきた。早朝、浅間神社でまたその人と会う。

「こんなに早くから学校ですか」私が持つ風呂敷包みを指差して言った。

いえ、お針のお稽古で、お掃除当番なので、と言ったつもりがうまく言えたかどうか。その人はうなづく、また清々しく去っていく。

昭和二年十月二十五日

その人と浅間神社で色々な話をした。

相武電車の工事で東京からきていること。

この近くの旅館に泊まっていること。相模川が美しいこと。

電車が通れば溝村も田名村ももっと便利になること。

セキグチ ショウゴ。心の中で呟く。

川島華見です。声が震えた。

この色褪せた小冊子を前に私は動けずにいた。ひいばあばの初恋日記はそれだけの色褪せない恋心が詰まっていた。次のページから「その人」ではなく「ショウゴさん」と呼び方が変わっている。

昭和二年十月二十七日

ショウゴさんと鳴海屋さんであんみつをいただく。

ショウゴさんは甘いものが好きだと言っていた。

昭和二年十一月三日

他愛のないおしゃべりが楽しい。

昭和二年十一月九日

明日はショウゴさんの誕生日だと知った。

明日も浅間神社で会う約束をして別れた。

昭和二年十一月十日

今日はショウゴさんの誕生日

二十二歳になったといふ。

私より三つお兄さん。

おめでとございます、といふ。

昭和二年十一月十一日

朝の風がだんだんと冷たい。

変電所の工事が終わったらショウゴさんは

東京に帰るのだろうか

寂しい

昭和二年十一月十四日

今日は悲しいことがふたつ。

私に縁談がきた。田名村の酒屋の次男坊らしい。

父母は乗り気。私は好きな人とめおとになりたい。

ショウゴさんが今月いっぱい大阪に赴任するといふ。

東京ではなく、おおさか。もっと遠い。

ショウゴさんには許嫁がいるのかしら。

大阪についていきたいと思ふ。

昭和二年十一月十七日

お見合いの日が決まった。

ショウゴさんに奥さんがいることを知った。

どうしようもない。

昭和二年十一月二十五日
今日、料亭加寿で酒屋の次男坊とお見合い。
何の気持ちも湧かない。
無口な青年。めおとになんてなれない。

昭和二年十一月二十六日
破談になった。酒屋の次男坊にはどうやら子供がいたらしい。
兄がどこからか聞きつけて父はそんな野郎に大事な娘をやれるかと怒ったらしい。
よかった。

昭和二年十一月二十七日
朝の薄闇でショウゴさんと偶然会った。
違ふ。会いたくて浅間神社で震えながら待っていた。
明後日、大阪に発つといふ。
一緒に行つていいですか。と言いたい。
でも、無理でしょう。
この人には妻がいるのだから。

昭和二年十一月二十九日
朝の浅間神社。一昨日よりも闇が深い。
私はショウゴさんに手紙を渡した。
不思議そう少し困った顔でショウゴさんはそれを
受け取る。そしてこう言った。
お元気で。この鉄道が開通する日にはその時は必ず来ます。
その時は、妙見橋で会いましょう。と
ショウゴさんは相変わらず清々しい。
お嫁に行つてるかもしれないわ。私はすねた言い方をした。
ショウゴさんのすつと伸びた腕が私の肩を包み込んだ。

たったこれだけの短い日記だった。でも十分だった。
いわゆるふりん。凜としたたずまいのひいばあからは遠く離れたところこの初恋はあった。実ることがない恋だからこそ、この日記は熱い想いがあふれているように伝わる。

「……」
ひいばあばはどんな手紙を渡したのだろう。もはや知るすべはないが、ふたりはこの後会えたのかな、再会できたと思いたい。
でも、いつたい、「妙見橋」ってどこ？

「妙見橋」上溝、鳩川に架かる橋、とある。近くには浅間神社もある。では、鉄道は？日記には「鉄道が開通する日には」とある。「妙見橋、浅間神社、鉄道」と検索すると「幻の相武電気鉄道」とでる。そのホームページを開くと、どうやら上溝から田名まで敷設工事をしたものの開通できずにその鉄道会社はつぶれたらしい。鳩川に変電所があり、その近くの浅間森付近に駅ができる予定だった。妙見橋はまさにその電車のために作られた橋だったという。会えなかったのだ。ひいばあばは会えなかった。私は悶々としたこの気持ちはどうしていいかわからず、どうしても、どうにもならないとわかっていても知りたかった。タイムマシンでもあればいいのにと本気で思った。セキグチシヨウゴなる人物に会うことはできなくともせめてその人をよく知る人に会って話を聞きたい。なぜ、こんな日記に夢中になるのか、私自身もわからないがひいばあばがそうであったようにその人も同じ思いで幸せであってほしいと思った。

それからしばらくの間、私の心はこの日記に占領された。そのおかげで離婚というただれたシミが少しずつ居場所をなくし私の心は再生に向かっていくことができた。仕事も決まり、自分自身の日常を取り戻すことでこの日記のことも忘れていった。季節がめぐり、家に戻ってから2度目のひな祭りを迎えようとしていた。

「おうちちゃん、お雛様出すの手伝って。」私の母はこういう季節の節目をとつても大事にする人で、おかげで私のメリハリのない日常に色を添えてくれる。

「もう出すの？まだ二月だよ」

「こういうものは早く出すものなの。一年間もここに眠ってるんだよ。少しでも早く出してあげないとかわいそうじゃない。」

今日は日もいいから。大安だからね、と。そこも母のこだわりだった。うつすらと埃を被った箱の中から男雛と女雛をメアワセル。その片隅にもっとひとつそりとあの日記が眠っている。去年、私に揺り起こされて目を覚ましたものの、またそこに居住まいを正している。私は、思わず、スマホを取り出した。

大正から昭和にかけて相模原に計画された相武電気鉄道を知っていますか？この電車にまつわる恋のお話。私のひいばあばの初恋です。ロマンティックで切なくて、恋の形は色々です。

イチかバチかツイッターで呟いてみた。なんとなくセンチメンタルになっていた。

去年とは全く違う思いだった。

うっすらと額に汗が滲む程度のテンポで私は歩いてた。風も凧いて心地よい。相模原駅は程よい人波で待ち合わせをはちようど良いかんじだ。腕時計を確認する。離婚してから初めて付けたオメガだった。今は他人の夫である元夫からの初めてのプレゼントで見た目はいいがメンテにお金のかかる厄介な代物だった。待ち合わせの十分前だというのに関口さんはいた。成城石井前の柱にもたれながら目でまだ見ぬ私を探している。その姿に好感が持てた。

私は小走りで近寄ると声をかけた。

「関口厚基さん？佐藤です。佐藤央見」

「あ、関口です。はじめまして」

「お待たせしました。遅くなっちゃってごめんなさい。」

「いえ、遅くないですよ。時間前ですよ」と関口さんは笑った。

お互い、ラインで顔は見知っていたが、実際に確認すると画像よりも若くみえる。画像の関口さんはスーツ姿だったが今日は濃紺のブルゾンにジーンズでその服装のせいかもしれないなかった。

「何処か、入りますか？曾祖父のメモ、読みますよね？」

「あっ、はい。私も曾祖母の日記、もってきました。」

相模原駅前には気が利いたカフェなどないが、どの駅にもあるコーヒーションップの一番奥の席にとりあえず落ち着いた。

ひいばあばのことをツイートして三日後、意外にも、いきなりダイレクトメッセージが届いた。

はじめまして。相武電気鉄道知っています。

曾祖父がかつて鉄道敷設の仕事をしています、相武電気鉄道にも携わっていたようです。

来月、相武鉄道の停車場予定地を訪ねてみようと思っていたので、このツイートをみて思わずDMしてしまいました。

これが最初だった。相武電気鉄道という単語にどきりとしてしまった。それから何度かやりとりするうちに彼が関口という名字であること、曾祖父の名前が関口省吾であることを知った。そのセキグチショウウゴさんが残したメモ書きがあるという。私は迷わず見せてほしい、と頼んだ。画像を送ります。と言われたが、私は実際に見たかった。ダメなですよ。SNSじゃあ。その量感が伝わらない。それで今日の待ち合わせとなったのだ。

あらためて自己紹介をし、この時は関口さんが茅ヶ崎に住んでいることを初めて知った。

「茅ヶ崎だったら相模線で橋本か上溝で待ち合わせの方がよかったですよね。」

「いえ、どうせ、淵野辺駅から田名のほうまで歩いてみようと思っ
ていたんで。」

関口さんは思い出したように少し慌ててそのメモを取り出すと、こ
れです。と言って私に渡した。それは、普通のB5判の大学ノート
だった。グレーの表紙のやつだ。私もカバンから日記を取り出す。

「曾祖父は定年後、以前自分が敷設に関わっていた鉄道を乗りに行
ってみたいんです。そのことが書いてあります。」

「でも、相武鉄道はできなかったんですよね？それも見に来たんで
すか？」

「茅ヶ崎から電車で一本で来れるということもあつたのでしよけ
ど、何回か来てみたいですよ。」

終戦後、東京から茅ヶ崎に移り住み、その直後に相武電気鉄道の敷
設跡地を見に来ているらしい。その相武電車の記載がある箇所は細

い付箋が貼られている。
「すみません、失礼します。」

私は、その大学ノートのページを恐る恐るめくつた。
何故だか少し気恥ずかしい。関口さんもひいばあばの日記を目で追

っている。静かな時間が流れた。
相武電気鉄道の箇所は3箇所あつた。最初が昭和二十三年四月、二

回目は昭和三十九年、東京オリンピックがあつた年で私の母が生ま
れた年だ。そして最後が昭和五十年。どれも同じ文章で同じ文言で

締めくくられていた。

相武電気鉄道はやはりない。

唯一、敷設できなかった。

それでも懐かしい。

妙見橋で会いましょう。

「あの、よかったら行きませんか？一緒に行ってみませんか？」
私は、アイスコーヒーを一気に飲んだ。なんだか、とてもせつなか

った。おそらく、関口さんも同じ思いだったのかもしれない。私た
ちは淵野辺駅から時間を辿っていくことにした。関口さんはやたら

と詳しく、地元の私よりも相武電気鉄道のことを知っていた。
淵野辺駅は学生がやたらと群れていて相模原駅よりもにぎやかだ。

若いエネルギーは私には既に過ぎた季節でやたらに眩しい。
「ここを起点に出発ですね。」次は矢部新田駅です。と関口さんの案

内で私たちはアスファルトの道を進む。矢部新田駅になるはずだっ
た場所は今の千代田五丁目付近らしく辺りは一面住宅街だ。かつて

は広大な原っぱが広がっていたのだろう。私は、何故だか宮沢賢治
の『銀河鉄道の夜』を思い出していた。

「凄いですね。地元の私なんかよりもよく知ってる。」

「いえいえ、みんなネットの知識です。」

そこで言葉は切れた。SNSだと次から次へと言葉がつけられるのに、いざ、面と向かうと言葉は途切れがちで、次の横山下（上溝）の駅予定地までどうしたものかと言葉を探している。でもそれは決して居心地が悪いものではなかった。

「私のうち、このあたりです。」

「佐藤さんはずっとこちらにお住まいですか？」

母の話ではひいばあばは元々上溝が実家で結婚して立川の方に住んでいた。終戦後再び相模原に転居し、そこからは代々相模原市民だ。ひいばあばは私が小さいころに亡くなったが、その印象はいつでもピンと背筋が伸びて凜とした印象だった。曾祖父のことは知らない。そういえば、写真も見たことがなかった。

横山公園が見えてきた。小さかった頃は、よくここで遊んだ記憶がある。お弁当を持って家族と来たり、幼稚園の帰りにお友達と寄ったりもした。母がママ友との情報交換に精を出していたのもこの公園だった。隣接する中学校に通学していた頃は部活の帰りにいつも友達と階段のところに座り込みおしゃべりしていた。クラスメートのことや先輩のこと、好きな人の話で時間も忘れて盛り上がった。そういえば、初めてできた彼氏と最初のデートは横山公園だったな、そんなことまで思い出す。

「最初、この公園と中学校の間くらいに駅を作る予定だったみたいですが。その後、スーパーの駐車場の辺りに変更になったみたいですけど。」

「へえーこんなところに」

散った桜の花びらが歩道の端を縁取り、時折それらがふわっと舞い上がった。

「桜、きれいですね。」

「ええ、4月の初めには市役所通りで桜まつりも開催されます。でも、大抵は散っちゃってますけど。」

中学校の正門の坂道の桜を眺めながら、関口さんは今度はそのお祭りを見に来ようかな、とぼそつと言った。ドキドキした。それは、関口さんへなのか、妙見橋が近づいてきたからかわらなかった。急に風が冷たくなってきて、陰った町並みがセピア色の映像に変わる。関口さんはグーグルマップを駆使していたが、多分、こっちのほうだと、と私が先に歩く。大通りを一本入ったまっすぐな道を進む。右手に鳥居があった。

「浅間神社、でしょうか。」

「これが浅間神社、ですよ。」ひいばあばとセキグチショウゴさんが初めて出会ったその神社は鳥居の朱色が、この桜の季節に似合っ

ていたが、社殿は見当たらず、民家の中で居心地が悪そうだった。「あれが浅間神社、かな」関口さんはもう一度確認するように呟いた。そして、遠くから手を合わせる。意外と信心深いんだなと思いつつながら、私も慌てて手を合わせた。ひいばあ、来たよ。手を合わせる関口さんとセキグチショウゴさんが重なるようだ。桃割れを結つた着物のひいばあ、華奢な後姿も見える。

「ひいばあ、来たよ。関口さんと来たよ。」
その先に妙見橋はあった。初めて見る妙見橋はもの見事に私の期待を裏切っていた。私は、石作りの欄干とか、もつと風情のある橋を勝手に想像していたが、それは、味気ないスチール製で何の取柄もない。もちろん、長い月日の中で付け替えているのだろうけれどちよつとその姿にガツカリした。

「妙見橋ですね。ちよつと想像と違いましたね。」
私は黙って頷いた。

「曾祖父の頃とはだいぶ違っているんでしょうね。」
風が冷たい。頬を撫でるそれは春の夕暮れの匂いがする。

「妙見橋というのは相武電気鉄道のために造られた橋だという話です。ネットの情報ですけど。」

「ええ：」
私はバッグの中からカーデイガンを取り出し、風に吹かれながらそれを羽織った。

「帰りましょうか。なんか、肌寒くなってきましたし。」

「相模川、いいんですか？」
「いちばんの目的は妙見橋でしたから。」

まっすぐ延びるこの道はかつて電車道だったのだろう。その面影はひとつもないけれど、レールの上をゆっくりと振動するその姿に思いを馳せた。

「もしも、電車が通っていて、ふたりが会えていたらどうなっていたんでしょうか？」
関口さんがにこりと笑った。

「そしたら、僕たちは存在してないよ。」

「あつ、ですよ。」
「だから、良かったんだと思うよ。」

会話の垣根がいきなり取れた気がする。

「ですね。」私も笑った。タイムトリップは終わった。

「相模川まではこの次、行きませんか？もう少し、暖かくなったら」「いいですね。」

「さくら祭り、もどうですか？」

「ええ、ぜひ」

（じゃあ、今度は、妙見橋で会いましょう。）

私は心の中で呟いた。